

「実験心理学」と「質的心理学」の相互理解のために ——菅村論文へのコメント

やまだようこ 京都大学大学院教育学研究科
Yoko Yamada Kyoto University

Title

For mutual understanding of the experimental psychology and the qualitative psychology : A comment on Sugamura's paper

菅村論文「生死の境界での語り——実験心理学から見た質的心理学」を読んで、違和感をぬぐえなかった。菅村氏が主張されている「実験心理学」の定義や前提そのものが筆者と大きくずれているからであろう。まして、「質的心理学」に対する定義や用語や研究内容に対しては、さらに大きなずれと誤解に基づいて論がすすめられているようだ。解きほぐさねばならない論点はあまりに多岐にわたり、それらすべてについてコメントを書く時間もないので、途方にくれてしまった。

菅村論文では、「実験心理学の手法を部分的に使うような方法論的折衷主義のレベルでは、質的心理学の確立にはまだまだほど遠い感がある。質的心理学ならではの認識論や方法論の模索が当面の課題になるであろう (p.157)」と結論されている。しかし、それこそ私が 25 年前からさまざまな観点から論じ、長年模索してきた課題だった。それが今の時点でも十分に達成されているといえないことは反省しなければならない。しかし、今までの著者の研究をふまえないで、わずかに一論文を読んだだけで「質的研究」全般についてのコメントが書かれ、新しい研究方向の指針が初めて示されたかのように模索が当面の課題として論じられると、いったい学問の蓄積というものを何と考えたらいいのか、啞然としてしまうのである。

たとえば、以下の記述は、1987 年に「日誌研究」について書いた部分であるが、「生死の境界」でとりあげたような「語り」の「事例研究」についても基本は同じといえるだろう。

さて、一つの方法が万能であることはありえない。現在のようにさまざまな行動観察の技能や機器が開発されている時代では、肉眼による粗雑な観察に頼り、しかも偶然性に左右されやすい日誌研究には、欠点や限界のほうはるかに目立つ。しかし、それを越えて採用する長所があるとすれば何だろうか。

第一には、行動を分割し、切り刻んで観察することからはつかめない、ひとりの子どものうちのさまざまな行動の関係性が把握できることである。一つひとつの行動記述の精度は部分に分けて調べた場合に比べて低下するが、そのかわり、多種の行動を力動性を保ちつつ明細化しやすくなり、行動の流れやその背景をなす文脈をつかまえることができる。

第二には、日誌研究は、いつ生起するかわからない自発的な行動の記録や、新しい行動の発見に威力を発揮する。

あたりまえのことながら、実験的な追求のためには、日誌研究は実験にはとうていかなわない。観察者側が作り出した条件変化に対して、乳児が

いかに反応したかをみることによって乳児の認識のしかたを調べようとするならば、実験法を用いたほうがよい。……

日誌研究の長所は、研究者の側からおこす行動ではなく、乳児の側から自発的に行う行動の記述ができることにある。いつ生起するかわからないが重要な自発的行動を発見し、拾い上げることができるのである。ピアジェの観察は、彼の側の関心テーマを組織的に追求することには成功したが、乳児の側からみて、乳児の関心事象を組織的に記述できたわけではないから、日誌研究の長所を最大限に活かすきつたとはいえないだろう。

同様に、調査的な追求のためには調査法を用いた方がよい。標準化されたテストを用いて生起頻度を記録したり、それを比較しようとするには、日誌研究は粗すぎる。

(やまだ, 1987, p.16-17)。

「実験心理学」と「質的心理学」という対立項の作り方自体にも違和感がある。論理的に考えれば、「実験心理学」と対比すべきは「質的心理学」ではなく、「現場心理学」であろう。あるいは、実験科学が威力を発揮しやすい仮説演繹法に対して、フィールド科学が力を発揮しやすい仮説生成やモデル構成法を比較すべきであろう。私の定義では、質的研究とは、数量的データを扱う研究に対して、広義の言語データ（テキスト）を扱う研究をさすから、実験法を用いた場合においても質的研究はありうる。それらの概念区分は、山田（1986）において論じた。

このように「質的心理学」に対する誤解についても、菅村論文に記されたいくつかの「論」をとりあげて既刊の論文をもとに反論していくことができるが、同じことを繰り返すことは好まないし、時間的余裕もないので、それらについては文献に記した論文や著書（山田, 1986；やまだ, 1987, 1995, 2000, 2002）を読んでいただけたら幸いである。

さて、このコメントではとりあえず、3つほどの論点について述べよう。菅村論文では、「こうしてみると、実験心理学が、質的心理学と比べて、いかに厳密な方法を尊び、正確な記述をモットーとするかがわかる (p.156)」と結ばれている。菅村氏の「実験心理学」に関する記述は、それほど厳密で正確だろうか。

まずその点に関する疑問を述べてみたい。

1 「実験心理学」の定義と、「数値化」「統計」との関連について

菅村氏は、実験心理学を「思弁を排し、実験を行ない仮説を検証することを通して、法則定立を目的とする心理学である。被験者や実験刺激、材料などの選定にも数として表現可能な基準が尊ばれ、結果の分析にいたっては、ほとんどすべてが数値によって記述され、それが統計的な意味において評価される (p.151)」と定義しておられる。

1-1 多くの実験は、「思弁を排し」ているのではなく、「(「思弁」を含む)「理論」に導かれた「仮説」を重要な前提としており、それに基づいて実験が計画されるのではないだろうか。実験が可能のところまで持ち込めば、ほとんど研究は終わりに近づいたと考える領域があるほど、「理論」や「仮説」は科学研究において重要な役割を果たしている。「思弁」だけで終わらず経験的データ（これは実験に限らない）によって実証すべきであることは、科学的方法論の基本であるが、それは「思弁を排する」とは意味が異なる。

1-2 科学的方法論としての「実験」では、必ずしも「数値化」や「統計的評価」が「ほとんどすべて」ではない。自然科学の実験においても、定量的な実験をする前には定性的実験をすることが当然とされている。したがって、数値によって記述されないデータ、「質的記述」によるデータを扱うことは実験的研究でも重要である。また、統計的評価も必ずしも必須ではない。厳密な実験であるほど、結果の可否はシンプルに出ることが多いので統計が不要なことも多い。ある化学実験者は統計も検定も使ったことがないという。なぜならば、実験にとって重要なことは同じ手続きをとれば同じ結果が出ること「再現性 replication」が保証されることだから、結果が不安定であれば、繰り返し実験して確かめることのほうが重要だからというのである。したがって、追試や再試によって結果を繰り返す

返し確認すること (replication) は、実験においては欠かせない手続きであるが、その結果が数値で表されているか、まして統計的処理がなされているかは二の次である。ただし、このような皮相な意味での「数値化」のことでなく、自然科学の発展と「数量化」そして「数学」の発展についてであれば、それは世界をどう認識するか、認識論の問題とかかわるので、両者には本質的に密接な関連がある。それについては、既に山田 (1986) とやまだ (1987) において論じた。

2 実験心理学の実験材料や事例の抽出のしかたについて

「実験心理学では、実験材料が適切であるかは、先行研究がない場合、予備実験や調査によって確認することが鉄則である。いかなる場合も、研究者の一存で決めるべきものではない (p.153)」「実験心理学の立場からすると、…事例の抽出にあたっては、ランダムサンプリングが基本であり、これによってはじめて、研究者の恣意性がかぎりなく 0 に近づき、個人差という剰余変数の混入する恐れが減るのである。(p.153)」「実験心理学では、無作為抽出は基本にすぎず、これで十分というわけでもない (p.153)」。以上のような菅村氏の記述にみられる「実験心理学」の基本理解は、これでよいのだろうか。

2-1 実験心理学の実験材料は、どのように決められてきたのだろうか。記憶実験はエビングハウスが無意味綴りを実験材料にしたことで飛躍的にすすんだ。乳児の知覚実験は、ファンツが顔図形を材料にしたことで新しい知見をもたらした。新しい実験材料の多くは、まず研究者の一存で決められてきたのではないだろうか。実験材料は、日常の観察にもとづくものも、思いつきや偶然の発見から選ばれるものもある。もちろん、現在では無意味綴りが批判されて、有意味材料を用いる研究になっているように、修正したり改良したり批判することはできる。しかし、先行研究がない新しい発見をする上での研究者の一存は、否定されるべきではない。むしろ、どのような実験材料を発見し

たり考案できるかが、実験の成果の勝負を分けるのであり、それこそが実験者の腕の見せ所ではないだろうか。

新しい材料を発見したり工夫することに関して研究者の一存を含むオリジナリティが重要であることは、実験研究でも質的研究でも同様である。実験材料でも質的研究の材料でも、その価値は、それがもたらした結果や知見によって決まるのであり、「研究者の一存」か「予備調査」によって得たか、などの事前の手続きで決まるのではない。

2-2 実験心理学では、「無作為抽出が基本」であろうか。もちろん、そのような疫学的実験もあるだろうが、それが実験法の基本だろうか。菅村氏の論には、実験法と調査法の混同があるのではないだろうか。

今までなされてきた多くの心理学実験では、心理学専攻の大学生が被験者になってきたが、これらの被験者はランダムサンプリングによって「無作為に抽出」されたのだろうか。私は大学時代に知覚実験を主体とする研究室で心理学の基礎を学んだので、大脳生理学とむすびついた知覚実験の被験者を多く体験したが、予備実験で結果がクリアーに出やすい人が選ばれ、その人の生理学的データが使われることが普通であった。しかし、それは必ずしも非難されることではない。実験状況をつくることは、日常性と異なる「純粋条件」「理想条件」を作り出すことだから、それに近い条件の実験材料や被験者を選ぶことはありうる。誰でもいつでも日常的に頻繁に起こることやランダムにおこることではなく、めったに起こらないけれど、純粋に条件統制したら仮説的には起こりうることを実験研究では追求できるからである。実験では、実験条件、手続き、結果の算出まですべてに研究者が意図的・操作的にかかわるのであり、「研究者の恣意性がかぎりなく 0 に近づく」とはいえないのではないだろうか。

現在でも精緻な大脳生理学の実験が、特定の事例に負って行われることは多い。たとえば Milner & Goodale (1995) は、「視覚システムは、行為のための視覚と知覚のための視覚という 2 つの異なる機能を調整することができる」という興味深いモデルを提案した。彼らの本を評して Decety (1999) は、彼らのモデルに使用された証拠は、ほとんど単一事例研究からき

ている。これは、認知神経心理学の力を示す良い例である。単一の患者の事例が健常の認知プロセスについて妥当な推論を提供しうる。いったん、あるプロセスが臨床的設定のなかで見出されたならば、それが健常の認知プロセスについての研究もさらに促進するのである」と述べている。もちろん少数事例のデータから過度に一般化することは危険である。しかし、新たな発見やモデル構成をする上において、無作為ではない少数事例やそこから得られる推論の果たす役割は、実験的研究においても質的研究に劣らず大きいといえよう。

以上のように、菅村氏が比較項とされる「実験心理学」の理解において筆者とは相当にずれがある。さらに対岸におかれた「質的心理学」の理解については、あまりにも大きい偏見と誤謬にみちているといわねばならない。「質的研究」はリーダビリティが高い、つまり普通の日常語で書かれているので専門性が見えにくく、誰でもすぐ読め、すぐできそうで何でも許されるように見えるかもしれない。しかし、実験研究の経験がまったくない人が実験法を単に「方法」として議論したり、一つの実験論文だけを読んで「実験法」全体を論じたとしたら、どこかのがはずれてしまうのではないだろうか。質的研究でも同様のことがいえよう。質的研究においても今までの研究経験や議論の蓄積がある。それをある程度「厳密に」「正確に」ふまえた上で議論をしていかないと、乱暴すぎる議論や議論のための議論になってしまう危険がある。対話が成立するためには、相手への敬意と相互理解が前提となる。ここでは、質的研究の方法に関しては、重要と思われる次の点についてコメントするとどめる。

3 斎藤茂吉の作品をとりあげることについて

3-1 斎藤茂吉の作品を質的心理学の素材にとりあげることについて、菅村氏は次のように反論している。「少数事例でも、そこに重要な心理的現実が含まれているならば、データとしての価値が高い」という筆者の見解に対して、「データにはすでに『重要』と評価

されるものが含まれているから、その『価値が高い』のは当然である。これでは同語反復にほかならない。(p.152)」

この批判には、「データ」という言葉が意味しているもの見解の相違が浮き彫りになっている。筆者には、「同語反復」とは思われえないからである。データとは、「立論の材料として集められた、なんらかの情報を内包している事実」のことである。データには、ローデータ (raw とは何かという議論は別途生まれる) から、さまざまな加工レベルのものが含まれるだろうが、「データ」=「重要、価値が高い」とは限らない。比喩を使えば、ダイヤモンドがあるかもしれない「地層」と、ダイヤモンドが含まれる「原石」、そして磨いてダイヤモンドにした「宝石」とは、明らかにレベルの差があり、価値にも相異がある。最初から条件を加えて加工したデータを集める実験的研究と、多方面から種々雑多なデータを集めて後に加工するフィールド研究との違いが、「データ」ということばの意味に関する見解の相違を生んでいるのかもしれない。

3-2 もう一つの例をあげて反論しよう。「やまだは、斎藤の作品などを『ある種の普遍性をもつ心理的現実が反映されている』と考えているが、実験心理学の常識では、やまだのこの推論は予備調査によって確認される必要がある。もっとも簡単なかたちとしては、いくつかの作品の該当箇所を多数の被験者に提示し、『そこに普遍的な心理的現実が反映されていると思いますか』と尋ね、『はい』・『いいえ』の2件法で答えさせたり、あるいは『全然そう思わない』から『非常に思う』までをパーセントで表記してもらい、操作的な基準によって、作品を選定するという方法が考えられる (p.153)」

以上の記述を読むと、まるで「多数決」や「操作的手続き」によって真実が決まるかのようであるが、これはパロディとして書かれているのだろうか。「実験心理学の常識」といわれていることも、「実験」ではなく「質問紙調査」や「意識調査」と混同されていないだろうか。「実験」の醍醐味はたとえ、99.9%の人がノーと言って反対しても、それを「実験」によって実証的にくつがえすことができるところにある。「地球が丸いか平らか」は、多数の意見を聞くという手続

きで確証できるわけではない。

バフチン (1963/1995) がドストエフスキーの「地下室の手記」をとりあげて分析したときに、「なぜドストエフスキーのその作品をとりあげるのか？」を上記のような手続きで当時のロシアの人々 (あるいは現代の日本の人々でもよい) に聞いてみたら答えはどうなっただろうか。あるいは、そのような手続きを踏んで作品を選ぶことが必然だっただろうか。もし彼がそうしていたら、すぐさま否定され、現代心理学に多大な影響を与えている「多声性」理論は生み出されなかったであろう。彼の著書は長らく出版できず、大多数の人々には理解されなかったし、現代でも真に多くの人々に理解されているとはいえない。ベストセラーや売れる商品の市場調査が目的ならば上記のような調査は有効かもしれない。しかし、実験心理学では「多数の被験者に示して意見を聞いて%をとる」という実証方法は有効とは限らないし、質的心理学ではそのような量的基準を根拠とすることそのものを疑っているのである。

3-3 菅村氏は、最後に斎藤茂吉の作品を分析するよりも、インターネットの語りを分析するほうが実り多いという提案をされている (p.157)。このように、ほかにも素材として別のものもあるという意見は、いくらかでも可能である。インターネットの他に、新聞も雑誌も漫画もCMも自分史も墓場も新興宗教も葬儀屋さんのインタビューも、関連して研究するとおもしろそうな素材はいっぱいある。しかし、「他のものがある」というだけでは、学問的な「提案」とはいえない。新しいデータと真に取り組んで研究し、問題や目的に照らして新しい知見を得ることがわかった時点で、初めて「提案」したといえるのである。そういう意味で、質的心理学の学問の進歩も、「実験心理学」が、ひとつひとつ実験を積み重ねていく手法と大きく違わない。もっと別の実験素材もありうるという意見や思いつきのアイデアだけでは、実験系の雑誌に論文が載らないように、『質的心理学研究』でもそれだけでは学問的な「提案」とはいえないだろう。『質的心理学研究』が求めているのは、観客席からの評論ではなく、第一線で自ら汗を流して限界に挑みながら一步一步研究を実践していく地道な研究活動である。

文 献

- Bakhtin, M. M. (1995). ドストエフスキーの詩学 (望月 哲男・鈴木淳一, 訳). ちくま学芸文庫, 東京: 筑摩書房. (Bakhtin, M. M. (1963).)
- Decety, J. (1999). What neuroimaging tells us about the division of labour in the visual system, *Psyche*, 5(9).
- Milner, A. D. & Goodale, M. A. (1995). *The visual brain in action*. Oxford: Oxford University Press.
- 山田洋子. (1986). モデル構成をめざす現場心理学の方法論. 愛知淑徳短期大学紀要, 25, 31-51. (やまだようこ (編). (1997). 現場心理学の発想. 東京: 新曜社, p.161-186)
- やまだようこ. (1987). ことばの前のことば. 東京: 新曜社.
- やまだようこ. (1995). 生涯発達のためのパーソナル・ドキュメント法. 無藤隆・やまだようこ (編), 生涯発達心理学とは何か——理論と方法. 東京: 金子書房. p.233-245.
- やまだようこ. (2000). 人生を物語ることの意味. やまだようこ (編), 人生を物語る——生成のライフストーリー. 京都: ミネルヴァ書房, p.1-38.
- やまだようこ. (2002). 現場心理学における質的データからのモデル構成プロセス. 質的心理学研究, 1, p.107-128, 東京: 新曜社.

(2002.11.20 受稿, 2002.12.1 受理)